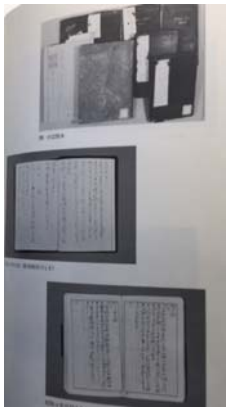
『関一日記　大正・昭和初期の大阪市政』刊行のことば

写真のように1000頁を超える『関一日記』が1986年に東京大学出版会から刊行されて 30 年近く経つ。大阪市政をはじめ、日本の都市政策を研究するうえで貴重な書物である。日記を発見し編集した関一研究会代表の宮本憲一先生の「刊行のことば」を要約して紹介する。

戦前戦後を通じ、その高邁な理論と実践力とを総合させたという意味で、傑出した自治体首長は関一であろう。

関一は、古代都市以来、日本では政治的権威のためにつくられた都市計画を、近代産業や市民生活のための都市政策にかえることに全力をつくした。その事業は首都ではなく、当時日本最大の産業都市であり、中央の統制をきらった「自由な大阪」という土壌の上にはじめて花を開いたのである。



関一は今日、大阪市の骨格をなしている港湾、パリを思わせる御堂筋などの道路網、地下鉄などの交通事業、電力事業、上下水道などを創設した。しかし、彼の偉大さは、このようなハードな社会資本をつくったというだけではない。ソフトな社会福祉や教育・文化行政を都市行政の中に位置づけたことであろう。助役時代に書いた『住宅問題と都市計画』の中で、彼は日本の都市計画が独仏流のオースマン（パリ都市計画の担当官）方式にならい、中央集権主義、街路中心、美観主義であったのに対し、これからは分権主義、住宅中心、保健主義＝実用主義でなければならぬとしている。あるいは、「上ヲ見テ煙突ヲ数エルダケデナク下ヲ見テ労働者ノ状態ヲ見ヨ」ともいっている。実際に、関はこの主張どおりに、社会部をつくり、日本最初の労働者家計調査をおこない、公営住宅、保育所、公設市場などをつくり都市自治体独自の福祉行政をはじめた。衛生試験所を中心に公害対策にとりくみ、帝大の官僚主義に対抗して実学を旨とする大阪商大（現大阪市大）を創設し、都市問題研究のシンクタンクとして大阪都市協会を発足させている。関一が急逝した時に、大阪市民のなげきは深く、8万人をこえる空前の市民の参列による市葬がおこなわれた。

関一の思想の独自性は、社会政策と都市政策（あるいは地方自治）を結合し「都市社会政策」を構想したことにあるのではなかろうか。これはビスマルク的な上からの社会政策、あるいは、福祉国家論にみられる英米流のナショナル・ミニマムとはちがって、自治体による「都市社会政策」である。貧困問題が都市問題と相乗し、たんなる貨幣的

所得保障では社会的不平等を解消できず、住宅・医療・教育・公害対策などの地域に即した都市政策でなければならないことが明らかとなった今日において、関一の都市社会政策論の評価が高くなるのは当然であろう。

しかし、同時に、ここに関一の思想の限界もあったといってよい。彼はマルクス主義を否定すると同時に、資本主義の自由な発展による社会的不平等も批判した。これは一種の御都合主義というか現実主義である。自治体行政による社会改良こそ、彼の実学の基本であった。したがって、彼は政党政治を必要な枠組みとしていたが、それを信頼しなかった。住民参加のような徹底したデモクラシーは、彼の念頭にはなかった。彼は都市社会政策を実現する自治体行政の独自性と行政家の計画に都市社会の前進を託していたといってよい。

関一の評価は私たちの研究会の内部でも対立があり一元的にいえない。おそらく、これらの新資料によって、こんごもその評価はさまざまに展開していくであろう。世に古典といわれるものは必ず、厖大で多義の解釈書の出版を生む。同じように歴史上、なにほどかの業績をなしとげた人物は、まことに多面的なのである。凡人はおのれの甲羅にあわせてしか評価できぬが、おそらく、関一の全体像はまだまだつかみがたいかもしれない。とはいえ、世の流れにつれて、さまざまな解釈と評価が生まれるところに、関一とその事業の偉大さがあるといえるのではないだろうか。

（2015 年 9 月 28 日）